

日系人の高齢者施設における介護の現状

ブラジル・サンパウロ州

さくらホーム、イペランジャホームの調査より

渡邊 薫

The Present Condition of Nursing Home Care for Japanese Immigrants

A Report of two cases in BRAZIL : SAKURA HOME and

IPELANDIA HOME

WATANABE Kaoru

はじめに

今日、日系人社会の高齢化に伴い、多くの人々が介護課題を抱えていることをうかがい知れる。日系 1 世の高齢化と、生産性のある年代層の日本における「出稼ぎ」の長期化などがそれらの原因としてあげられるが、『ブラジル日系社会高齢者実態調査』のアンケート結果に「老後や要介護状態になった時に対する不安」を訴える回答が多いことからわかるだろう。現在のブラジル日系人は、衛星放送などにより、介護・福祉に関する情報が随時伝わっており、「介護」に対する期待やニーズも高まっていることも知られている事実といえるだろう。(前掲書より)

筆者は 2003 年からブラジル・サンパウロ州における日系人の高齢者施設の調査研究を行ってきた。これまでの研究は、日本の国内の特別養護老人ホームにあたる高齢者のための介護施設で 40 名程度の規模のものを対象としてきたが、サンパウロ州内には、他にも何件かの小規模高齢者施設が存在し、少なからず介護が行われている。これらの施設における介護の存在は、サンパウロ州内においてもあまり知られていない。今回の調査研究では、それらの施設の内、「サンパウロ日伯援護協会」の 2 施設の生活の状況を客観的に把握することを目的

とした。これらの情報は、2003年8月に3日間滞在した際に行った聞き取り調査や、インタビューの記録、文献によるものである。

1. サンパウロ州における日系人高齢者のための小規模施設とは

サンパウロ州内には、定員50名以下の小規模な高齢者施設が3施設（筆者調査）存在している。その内の2施設は「サンパウロ日伯援護協会」（以後、援護協会と略記する）の施設であり、筆者は2003年に約2ヶ月間滞りし調査を行っている。これらの施設は、日本国内の養護老人ホームと経費有料老人ホームに数名の要介護者が入所している状況である。

2. カンポス・ド・ジョルドン「さくらホーム」について

写真1.施設全景



写真2.新館

施設の概要（歴史、職員数、勤務形態、介護職の業務内容、記録）

施設の歴史

サンパウロ州近郊の保養所であり、ブラジルのスイスとも呼ばれているカンポス・ド・ジョルドンに1937年に結核療養所「サンフランシスコ・シャビエル療養所」として開設された。その後、1965年援護協会に移管され、「カンポス・サナトリオ」として運営されてきたが、結核患者の減少と一世の高齢化などによるニーズの変化により1999年現在の老人ホームとなった。また、保養地としての特性を活かし、一般の宿泊を受け入れ施設を開放している。

職員数（2003年度）

施設長1名、管理係1名、看護、介護職員等15名

勤務形態と時間

早出 6:30～15:30、9:00～18:00、
夜勤 19:00～7:00

写真3.トイレ誘導の様子



介護職の業務内容

体操の指導、アクティビティの指導の他、トイレ誘導、リネンチェンジ等の日常生活の介助を行っている。入浴介助については 2 人でやっている。ブラジル国内では高齢者施設において浴槽の設置は無く、シャワーでの入浴である。

記録について

血圧測定、排便についてのチェックを行っている。個人の生活についての記録は無く、日勤、夜勤とバイタルチェックと特記事項についての記入ノートがある。日勤と夜勤の引継ぎについては、口頭で行っている。入所にあたっては、援護協会の福祉部（相談窓口となっている機関である）が調書を作成している。写真 4 . 看護・介護職員カウンター



利用者の生活（1日の生活、食事、行事、利用料）

一日の生活

毎日朝、昼、夕の体操、火、木曜日はすごろく、ビンゴ、ゲートボール、ボーリング、折り紙、週に 1 回書道、図書室の利用、マーじゃん、将棋、囲碁、などボランティアによる手芸教室、NHK 衛星放送による日本語番組の視聴など、アクティビティも多く、入所者はそれを選択している。



写真 5.新館の居間（暖炉を設置）



写真 6 . 新館内のスロープ

2003 年にはテラスを設置したことにより、そこで各自手芸を行い、日光浴をし、うたた寝をする場所にもなっている。また、入居者間の会話が増えたとの報告もある。（施設長談）



写真 7 . 新設されたテラス



写真 8 . ボランティアと会話



写真 9 . 朝の挨拶の様子

写真 10 . 朝の体操風景



写真 11 . 朝の体操の終わりは入居者と職員が全員、握手をする



写真 12 . 昼の体操



食事

食事は、日系人の職員が調理しており、朝食は、パンにマーガリンをたっぷり塗りと塗りハムやチーズをはさんだもの、コーヒーかコーヒー牛乳、フルーツなどである。昼食、夕食はブラジル伝統食のフェイジョン（煮豆のスープ）、カツレツ、サラダ、日本食の煮物など、日系人の生活で馴染みのある家庭食が用意されている。食堂には、テーブルクロスが掛けられ、各テーブルに造花が飾られていた。写真 13 . 食堂



筆者の調査の直前に、ブラジル衛生局の監査があり「生花を食卓に飾るのは食品衛生上不衛生である」との指導があったため、その後より造花を使用している（施設長談）。



写真 14 . 週間予定表



写真 15 . アクティビティ「折り紙」

年間の行事

地域の（日系人以外の）老人施設との交流（ジビーナ・プロビデンシア老人ホーム、ノッサ・セニョーラ・ダス・メルセス老人ホーム）が行われ、交互の訪問、フェスタ・ジュニーナ（ブラジル農村部の伝統的祭り）【1】が開催された。



写真 16. 「さくらまつり」会場の庭

また、州立植物園へのピクニック、スザノ・イペランジャホームの「ダリア祭り」へ参加し、外出活動も行われている。

施設の大きな行事として、2002 年より開催されている 1 月の「あじさい祭り」（1500 人の参加）、地域の観光行事ともなっており 8 月の週末に 5 日間行われる「さくら祭り」（約 1 万人の参加）が開催された。これらの行事は、施設運営資金を歳出することを目的としている。



写真 17 . コンサートなどの催事場

利用料（月）

1 人部屋 R\$1,200、2 人部屋 R\$960、3 人部屋 R\$720 であるが、実際に本人が負担しているのは 2 名、家族が負担しているのが 14 名、所得が低く、利用料を支払うことが出来ない入居者が 10 名である。その費用については、援協が負担している。（援護協会は、会員によって構成され、会員の会費にて運営されている。）

利用者の状況（入居者数、入居者の国籍、年齢、在居年数、健康状態）

入居者数

2003 年度末の入居者は 26 名。ちなみに、一般の利用者数（宿泊）は年間 1,830 名である。

入居者の国籍

日本 21 名（男性 9 名、女性 12 名）、ブラジル国籍日系 4 名（男性 3 名、女性 1 名）、ドイツ 1 名

年齢

60～69 歳 1 名（男性 1）、70～79 歳 12 名（男性 8 名、女性 4 名）、80～89 歳 10 名（男性 2 名、女性 7 名）、90 歳以上 3 名（男性 1 名、女性 2 名）

写真 18 .居室前の居間でテレビを視聴する入居者



在居年数

1 年未満 9 名、1 年～2 年 8 名、2 年～3 年 5 名、4 年～5 年 0 名、

5年以上5名

入居者の健康状態

歩行：自立歩行15名、杖使用1名、介助歩行6名、車椅子4名

介護：自立9名、若干要介護5名、要介護12名

認知症度（痴呆）：若干進行6名、大分進行8名

写真19．中庭での日光浴

備考

右の写真にも見られるように、施設長は施設内において、入居者が落ち着いて過ごせるように、入居者のための「居場所づくり」を進めていた。新設されたテラスの他に、木々が鬱蒼と茂っていた中庭を、明るく、日差しが入る日光浴の可能な場所にした。この場所は、居室前の居間の直ぐ前であり、歩行に困難を覚える入居者でも短い動線での移動が可能である。



また、さくらホームでは、入居者と、職員も穏やかな表情を見せていると感じている。介護における「穏やかさ」は介護が有効となるために必要な条件である。

介護者は日系人が一人、他はブラジル人である。昨年まで、JICAの青年ボランティアが派遣されていたが、現在は不在である。職員へのインタビューによると、排泄の時間を記録し「オムツ外し」に取り組んでいることや、夜間時の認知症の興奮状態への対応について困難を感じているとのこともあり、介護職員への介護研修の必要性も訴えている。



写真20．JICA シニアボランティア安達氏（左）と筆者（右）

今後の方向性として、施設長は「介護」の必要性を感じており介護職員の増員を考えている。しかしながら、人件費との兼ね合いで、援護協会との折衝が必要であるとのことであった（施設長談）。さくらホームでは、ゆったりとした時間のなかで自

分の居場所づくりが考慮され、穏やかな「介護」が行われていたと感じた。有効的な「空間」をつくる事によって、自分自身の居場所づくりが行われていると考えられる。

3. スザノ「イペランジャホーム」について

施設の概要（歴史、職員数、勤務形態、介護職の業務内容、記録）

写真 22. イペランジャホーム



施設の歴史

1982年サンパウロ市近郊スザノ市パルメイラの農業経営者、内谷氏が59,080平方メートルの農場を援護協会に寄付したことから経費有料老人ホームとして開設された。建物の老築化により、2002年には上記の写真のような施設が、日本財団の助成により建築された。広大な敷地の中には、

日々の食材の農場、豚舎、ダリア園、イPPER（ブラジルの国花）の庭園がある。また、施設は母屋と洗濯室、職員宿舎、ホールが設置されている。

写真 23. 農園



写真 24. 庭園



職員数

ホーム長 1 名、看護師 2 名（日勤 1 名、夜勤 1 名）調理員 1 名、調理
と他業務職員 2 名、農事係 2 名、夜間警備 2 名、嘱託医 1 名

勤務形態と時間

日勤 7:00～6:00（早出勤務もあり）

夜勤（19:00～翌朝 7 時まで）

介護職の業務内容（主に看護師と他職員が補助）

オムツ交換、トイレ誘導、入浴介助、日光浴、服薬管理。レクリエーションに関しては、ボランティアスタッフ（JICA シニアボランティア）が担当（2003 年度 10 月まで）。

記録

毎日、入居者ごとの血圧、脈拍、体温について看護師が記入している。その他、個人別の記録は、食事（3食）の摂取、お茶、おやつ

午前、午後のオムツ交換、排便、服薬、シャワー、家族の面会について毎日チェックする用紙がある。

利用者の生活（一日の生活、食事、行事）

一日の生活（時間）

7:00 ラジオ体操

7:30 朝食

レクリエーションプログラム

入浴

10:00 お茶

11:30 昼食

レクリエーションプログラム、

入浴

14:30 カフェ（おやつ）

17:30 夕食

就寝



写真 25 . 日光浴の様子



写真 26 . おやつ風景

食事

自家栽培した野菜などを使用し、日系人職員が調理した日本食が提供されている。朝食は、ブラジルの一般的なパンとコーヒー牛乳である。2003 年度には、JICA ボランティアの管理栄養士により、調理指導を受け、栄養面の計算も行われるようになった。

年間の行事

3 月ダリア祭り、4 月復活祭、4 月合同運動会、7 月モジ市ゴルフ場への日帰り旅行、8 月スザノ市老人の集い、イッペー祭り、9 月日系 4 団体による“老人週間”、12 月テルマ・デ・サンパウロへの日帰り旅行、12 月クリスマスなどが行われている。

写真 27 . イッペー大木と花



利用者の特徴（入居者数、入居者の国籍、年齢、在居年数、健康状態）

入居者数

24名（2003年度末）男性8名、女性16名

入居者の国籍

ブラジル国1名、日本国22名、中国1名

年齢

70～79才6名（男性2名、女性4名）、80～89才10名（男性1名、女性9名）、90才以上8名（男性5名、女性3名）

在居年数

1年未満13名、2年未満2名、3年未満4名、4～5年2名、5年以上3名

健康状態

歩行：自立歩行17名、杖歩行3名、介助歩行3名、車椅子1名

介護：自立13名、若干要介護7名、要介護4名

認知症度：軽度3名、重度1名

写真28．東屋でのレクリエーション



写真29．レクリエーションの部屋



備考

イペランジャホームは、広大な敷地の中にあり、自家農園で取れた野菜を食事に取り入れており農作業を行う入居者もいる。食事は、漬物、味噌汁なども付いており、昼食は肉、夕食は魚が中心となったものであり、筆者が滞在した施設の中でも日本食が充実していると言えるだろう。

入居者はサンパウロ近郊から入居しているケースが多く、家族は週末になると面会に来る。ちなみに2003年6月の延べ面会数は、65人である。

自然環境に恵まれた敷地内を自由に散策することも可能であるが、歩行が困難になっている入居者は、自発的には行っていない。そのため、看護師が促がしている状態である。また、自然環境に恵まれた所であると同時に、交通の便が悪いため、ボランティアの来訪が限られている。そのため、2003年事業報告書では、JICAによるアクティビティのボランティア派遣を要請している。

日常生活での介護では、看護師が中心となり、他の職員が補助を行っている。他の施設では、掃除、洗濯、調理などをそれぞれ専門として職員が業務を行っているが、この施設では、これらの業務をローテーションで行っている。この業務体制はブラジル国内では特徴的と言えるだろう。（分業、夜勤、日勤の担当制を取っている施設が一般的である）

4. サンパウロ州における日系高齢者のための小規模施設の特徴と課題

以上、2施設について述べてきたが、さくらホームでは「居場所づくり」を実施し、入居者のゆったりとした落ち着いた生活が見えた。また、イペランジャホームは、日本食の充実と、農園の活用、職員と入居者のかかわりが密接であった。どちらも家庭的雰囲気を活かし、それぞれの特徴を生かしているといえるだろう。

しかし、これらの施設にも抱えている課題は少なくない。さくらホームでは、広大な敷地の管理に費用と時間が掛かる事。また「さくらまつり」の収入が減少してきており、祭りの効果が少ない。（従来、祭りは施設運営資金源であった）など、施設のあり方を考える時期に来ているといえるだろう。イペランジャホームでは、やはり広大な敷地の管理、運営費用などが課題とされていた。

両施設においての共通の課題といえることは、施設長が介護の重要性を訴えており、要介護状態になっても他の施設（特養など）に移動することが無いよう、車椅子でも、寝たきりになっても受け入れ可能なホームを目指している。しかし、現在は「介護」について教育を受けた職員は存在していない。日常の業務の範囲で介護を行っている（看護師、その他の職種が行っている）。当面の課題は、職員の介護教育であろう。そのためには、費用も必要であるが、「介護」の専門家が必要であると施設長は述べている。（筆者インタビューによる）

おわりに

サンパウロ州における高齢者の施設について、調査を行いそれぞれの施設の特徴をわずかながら捉えることができた。課題についても、施設長へのインタビューから「介護」の必要性が述べられている。今後、サンパウロ州内には特別養護老人ホームのような施設を開設するのは、莫大な資金を必要とし難しいだろう。しかしながら、小規模の既存の施設において、「介護」の技術とシステムを導入し、機能させていくことは可能と考える。その方法については、いまだ考察に至っていない。今後の研究課題と捉えている。

今後も、ブラジルの日系人高齢者における、「介護」の状況を調査すると共

に、「介護」の質の向上に貢献できればと願っている。

(平成 17 年 3 月 18 日 受理)

参考文献

- 【1】「朝日新聞」2004 年 6 月 28 日紙面『フェスタ・ジュニーナ』
- 【2】「ARC レポート 2003 ブラジル」世界経済情報サービス(ワイス)編/発行 2004 年
- 【3】「援協 40 年史」サンパウロ日伯援護協会刊 1999 年
- 【4】「ブラジル 日本移民八十年史」日本移民 80 年史編纂委員会編/移民 80 年祭典委員会・ブラジル日本文化協会 1996 年
- 【5】「ドナ・マルガリーダ・渡辺 移民・老人福祉の 53 年」前山 隆編著 お茶の水書房 1996 年
- 【6】「日系ブラジル人の定住化と地域社会」小内透、酒井恵真編著 お茶の水書房 2001 年
- 【7】「異文化コミュニケーション摩擦」西田ひろ子編 創元社 2003 年
- 【8】「日系人の高齢者施設における介護の状況 - ブラジル・サンパウロ州、あけぼのホームから - 」渡邊 薫著 静岡県立大学短期大学部研究紀要 17 - w 号 2003 年度 - 8
- 【9】「ブラジル・サンパウロ州 日系人高齢者の介護福祉とその状況について」渡邊 薫著 月刊 総合ケア vol.15 no.2
- 【10】「ブラジル日本人移民 20 世紀のあゆみ」日系新聞新年特別号 日系新聞編/刊 2000 年

脚注

「ブラジル日系社会高齢者実態調査」サンパウロ日伯援護協会編/発行 2003 年P.25～26

「サンパウロ日伯援護協会 事業および決算報告書」2002 年度、2003 年度 サンパウロ日伯援護協会発行 P.14～16

同上書 //

同上書 P. 24～26

同上書 //

同上書 //

